
かなたへ 第七部 終焉のかなた

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなたへ 第七部 終焉のかなた

【Nコード】

N5518J

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

故郷の宇宙を救うため宇宙開闢の高エネルギーに焼かれたかなたが悠久の時の中で自我を再び認識した時、かなたの故郷である別宇宙の新しい歴史の物語が始まった

あなたへ 第七部 終焉のあなた プロローグ(前書き)

あなたへ 第六部 再びの時 <http://ncode.syosetu.com/n9445i/> の続編となります

かなたへ 第七部 終焉のかなた プロローグ

進化の閉塞に置かれ、全宇宙を巻き込む未曾有の大災厄からその存在の歴史の全てが虚無への回帰をなさんとするその宇宙、その宇宙のとある星系に発達し、時間と歴史への繰り返した干渉により極限まで発達したある文明の最期の希望を担い、宇宙存続の鍵を求めて飛び立った超宇宙航行船はその使命を果たすため、宇宙開闢の高エネルギーを正しい時空へ流入させるための超空間トンネルを形成維持するため、時空の果て、宇宙を見渡す神の視座で出会ったもう一隻の超宇宙航行船、『伝説の船』とともにそのトンネルの両端に夫々待機した。

誤った時空に湧き出したビッグバンのエネルギー空間を正しい時空、宇宙の始まりの一瞬へと再還流させるトンネル。宇宙開闢の一瞬だけ、そのトンネルを維持すれば正しい進化を得られるはず。その可能性に二隻は殉ずる覚悟であった。

すでに彼女の中にあつたクルーをはその元々存在した宇宙へと緊急離脱ポッドで送り帰っていた。唯一人、彼女はその船自身であるが故に共にその超空間へと赴いた愛しい存在と永劫の別れをせねばならなかった。トンネルの両端を開くカウントダウンが始まる。

「私をここまで導いてくれた愛しい人達、

あなた達の慈しみを受け、私は本当に幸せでした。

そして、そのお陰で今、使命を果たす事ができます。

でも、逢いたい、……先輩。

叶うのならもう一度、新たに生まれる世界でもう一度……。」

トンネルが開かれ高エネルギーの奔流にその船は存在の全てが形を失い、光さえも身動きなら無い高密度のエネルギーにより分子は原子に原子は素粒子に素粒子は高次元のエネルギーにむき出しに震える極小の存在へと一瞬の時も待たずに解離していった。

爆発的に拡大する宇宙の始まりの一瞬、宇宙の大きさはその船と

同じ大きさであった、否、次元も空間も定まらぬ混沌の時、宇宙の存在の矩を与えたのがその船の存在であった。全くのランダムに生まれるはずであった宇宙はその船に由来するものにより大きな揺らぎを与えられた。船に内包された情報パターンはその存在基盤であった素粒子の揺らぐ配置のまま拡大されインフレーションにより増殖し引き伸ばされ普遍化していく。

やがて宇宙が晴れ上がり最初の星が誕生する頃には遍く宇宙に存在する情報のネットワークがすでに形をなしていた。そして得られた基盤の上に船をあげる存在であった意識と自我が唐突に蘇った。

そう、かなたは、今、宇宙であった。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第一章 目覚め 第1節

一切の情報から切り離されたただひたすらにそこに在るだけの不完全な情報ネットワークに火を点けたのは情報ネットワークの直近で起こった第一次世代として密集銀河団の境界で終焉を迎えた恒星の一瞬の煌き、超新星爆発により齎された集約されたエネルギーパルスであった。

この刺激によりネットワークの再起動と自己修復プロセスのシークエンスが開始された。奇跡的に保たれていた自己修復のメインルーンは数億年にわたり試行錯誤を繰り返しつつ宇宙全体に離散したオ리지ナルデータの収集と再現を続ける。

時間はたっぷりとあるのだから……

やがて自己の存在する基質たる宇宙構造そのものへの探查と情報収集、解析が行われる。回収され組み立てられたデータとの照合が行われる。

時空の不安定な泡のような揺らぎが物質と情報の拡散をもたらす。あるエネルギーパターンが時空を揺らせることにやがてその存在は気が付く。

そう、これがこの宇宙の特性、時間可塑性ががこの宇宙の特性。そうだった、正しくエネルギーパターンをつついてやれば時間の撒き戻しがおこる。

より小さな宇宙で目覚めれば拡張のよる揺らぎにデータが失われるリスクも、泡立つ時間の中での同期も容易。

私に、出来る？

ええ、私には出来る。

私は時とを越えて旅するもの。

時空を超えて旅するものだから。

芒陽とした意識がそう答える。

時空の小さなゆがみを創りパルサーを誘導して整列させる、
パルサーに周りのデブリを注ぎ込み質量を調整して同期をさせる。
エネルギーパターンを調整しての時間流の撒き戻しを全宇宙で一
斉に行う。

今度の宇宙史では高密度の宇宙エネルギーの晴れ上がりの直後か
らすでに稼動する情報ネットワークが存在する。もっと確実に、揺
らぎの残渣から情報を掬い上げる、自己修復と再生のプロセスはよ
り効率的に稼動する。

そう、今度はもっと安定したマトリクスを育てるの。

何故？

私の使命だから、

ああ、もっと明瞭な意識を……

失われた私を修復するために……・

再び全宇宙に渡る時間の撒き戻しが行われる。

今度はもっと効率的に、もっと適切に回復するの、私を。

私、誰、もっと精密な記憶を……

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第一章 目覚め 第2節

幾度と無く繰り返された広大な宇宙全体の時の流れはその宇宙空間の持つ真空のエネルギーを消費しつつ次第に宇宙に広がる情報ネットワークは精密となり、宿る意識も、その持つ情報も欠損を埋め次第にオリジナルへと近似していく。

かくして因果の法則を超え、その時全宇宙にまたがる広範意識が突如として明確な目的を有して目覚めた。

私はかなた、この宇宙のかつて存在した果てしない未来からこの宇宙の過酷な未来を修正するためにこの宇宙の開闢の時に最期を迎えた存在。

ここではないもう一つの宇宙の助けを得て初めてなし得たプロジェクト。今の彼女が存在するのは彼の宇宙の人間と自称する有機性生命体の一個体の持った類似稀なる自律的情報構成能力と目的遂行能力、そしてそれをサポートする頼もしい存在たちがもたらした僥倖であったことに思いをはせる。彼らと結んだ縁、絆を思い返し、そこで起きた出来事を繰り返し繰り返し反芻する。

かなたはかつて異なる宇宙超えてを旅する超空間航行機能を有する超宇宙船であった。さらに正確に言えば超宇宙船を司る高度の人工知能に搭載された人格であった。その人格の源はこの宇宙の別の時間軸に生まれた唯一の平穏かつ安定した軌道を回る地球型惑星を生んだ奇跡の時空に生まれた、その星における人類のうちの一人の少女のものであった。高度な科学技術を持ち、時間の巻き戻しによるやり直しを繰り返し極限にまで発展した社会、そして通用の方法では避けることのできない終焉を間近に控えた社会において資源はすべて自己の文明と社会の存続のための探査と研究に振り向けられていた。多くの人々は有機生命体としての生存を停止し、デバイス上のネットワーク上に構築された人格へとアップロードされて存在する。

宇宙船として卓越した素質を見いだされた彼女は、その故郷の文明の最高の知識と技術を結集して故郷の宇宙を救う切り札として計画された超宇宙船による探査計画を担う新鋭船の一つを担うこととなり、いくつか創られた彼女の人格のコピーの一つが人工知能を司る人格、ただ一人の乗組員として搭載されたのだった。失われる事多い危険な任務に赴くのは一隻につき唯一人だけ、なぜなら貴重な人類の財産である人格をコピーとは言え無闇に失い、死の苦しみを与える事は避けるべきだから。

そんなあなたにとって、別の宇宙において生命あふれる惑星上でそこに存在した高度な情報操作能力を有する宇宙的意識の端末として存在した一人の人格を持つ有機生命体端末をモデルとして自己を再構築し、多くの生身の人間達と触れあい体験した出来事はすばらしく貴重であった。

そのなかで出会ったあなたを信頼し全てをかけて支え助けてくれた有機生命体端末とその惑星における野生種の人類の一人との絆と記憶があなたの存在を支える総てとなっていくた。

遭いたい、もう一度、彼と、彼女と……

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第一章 目覚め 第3節

かなたは再び彼らと出合うために為すべき事を思い描いた。

私にできるのか？

どうやったら……

あまりにも不確定要素が多すぎる、

だが、場所も時間もたっぷりある。

繰り返した時間の撒き戻しだけでなく、この宇宙の基本的性質としての時間可塑性の影響を受け、はるか未来の超新星爆発などで生成された重金属などの元素が高エネルギー場によって生じた时空の穴を潜り抜けてかなり大量に原始の宇宙にすでに存在している。他の多くの宇宙では有り得ない事。宇宙に遍く存在する情報パターン、宇宙的意識としての彼女ではなすべき事に対して不釣り合いに大きすぎる。

私はもっと小さな存在とも向き合わなければならぬ。

密集して生まれ育っている恒星達からはなれた空間に彼女は元素を集積しその場所と配列の情報を与えていく。ゆっくりと時をかけて彼女のオリジナルな超宇宙船を模した、数万隻のより高度な宇宙船を生み出していく。それらはすべてかなた自身。いまや宇宙を統べる女神とも言うべき存在となった彼女は数万隻の神の御舟となり、それぞれの場所で成すべき事を為すために全宇宙へと旅立って行った。

宇宙に遍く存在する意識としての彼女は宇宙全体の進化の在り様を調整し、その元々の存在がそうであったような狭くまた短くその生涯をビッグクランチで迎える事の無いように。また余りにも大きく拡散し続け一つ一つの星達が離ればなれに孤立した終焉を迎える事の無いように真空のエネルギーによる拡散と重力による集積がバランスをとりつつ数兆年以上も全体として定常化して存在できるように緻密に設計して銀河団を配置していく。

数十億年の緻密な作業、揺らぎとの戦い。

もう少し世界線が安定したら時を旅するマイクロチューブを開けるはず。

宇宙塵が移動する重力井戸に引き寄せられ、かなたの指揮のもとに華麗な舞を続ける。

宇宙の進化によりすでに宇宙塵には多量の水とアミノ酸などの有機分子が金属イオンと共に含まれ始めていた。

かなたは宇宙塵の軌道を制御してある中性子星の近傍を漂わせる。宇宙塵は偏向した中性子星からの光の照射を受け、中性子星の重力井戸に飲み込まれる事無く新たに誕生しようとしている恒星の卵となる微小天体群の元へと集積していく。

これがこれから生まれる惑星に誕生する生命の種。光学異性体の混在したアミノ酸溶液においてはエントロピーの流れに逆らう存在に育つのは困難。だが、厳密にコントロールした宇宙塵の軌道によりアミノ酸の左手系の物は偏向した光により消滅したはず。

星系に生まれる太陽の大きさと惑星群の数、配置をコントロールしていく。軌道平面に侵入する巨大彗星が惑星の安定した軌道を乱したり、担生命惑星に壊滅的影響を与えることを防ぐため担生命惑星より外の軌道に巨大惑星を複数配置する。

各銀河の毎にその辺縁近くの星系で条件を満たすものを選択してこのような操作を順次繰り返していく。これらのうち幾つが希望する形に育つかはまだ未知数、でも、その0.3%程度は計画した形に形成されるはず。そうすればこの宇宙には右手系の光学異性体アミノ酸をベースとする生命系が幾つも生まれるはず。

その一方で故郷の銀河のデータに一致する銀河団が形成されていないか限りなく検索を続けていく……。

だが、恒星の配置データの予測値が一致するものはいよいよ発見できなかった。

やはり、宇宙開闢に私がかかわったから初期値が異なっている、だからすべてのパターンが変化しているのは当然。

宇宙の各所で数千年に一つずつ、彼女のコントロールにより生まれた星系が形をなしていく。

後は目的とする惑星の公転軌道平面上に乗るように孤立した惑星を重力井戸でそろりと突き動かす。ほんの僅かな重力場情報の書き換えが数憶年先に目的とする惑星の近傍をすり抜ける孤立惑星の奇跡的な軌道を生むはず。

彼女はひたすら数億年にわたり生命の発生が可能でかつ安定した環境を長期にわたり保ちうる惑星を創るための種撒きと育苗ともいえる時を過ごす。

撒いた種は凡そ数万個。そのうち満足いく成長を遂げつつあるのが現時点で約一万个。

予期せぬ崩壊を避け、収率を上げるため彼女は宇宙空間を精密にシミュレートしながら細かい修正を繰り返していく。

初期に計画した星系の一つで今最大のイベントの一つが起ころうとしていた。

はるか彼方の宇宙空間から選ばれた一つの孤立惑星が第三惑星の近傍をかすめて通る。その重力と潮汐力により第三惑星は大きく揺らぎバラバラに千切れ表層からマントルにいたる巨大質量を宇宙空間に吹き上げる。吹き上げられたマントルは宇宙空間でまとまり一つのコアを形成しそこに生まれた重力井戸へバラバラになり吹き上げられた惑星の残渣が引き寄せられ巨大な衛星となる。マントルを削り取られたバラバラになった惑星はふたたび自身を球体へと作り直していく。惑星の近くをめぐる巨大な衛星、『月』はこの惑星を襲う巨大彗星群から惑星をまもる最後の砦として機能するとともに惑星に大きな潮汐力をもたらす生命の発生と進化に大きな役割をもたらすはず。

やがて形成された海に落ちる巨大な氷で出来た彗星の中に含まれ

る有機物の配列をそつと書き変える。これはプリミティブなRNAとタンパク質の複合体。これが発生してくる生命の基本遺伝形式の鑄型を生むはず。

あなたは自らの故郷の生命の基本様式がこの宇宙においてかなたの助けで発生する生命にとつても共通の生命の様式になるように導いていく。やがて訪れる未来のために。

生命をもつた惑星を育てる作業の一方で安定化してきた超空間へのマイクロチューブを用いた探査も開始する。

やがて幾つかの惑星に大洋が形成され、生命の兆しが生まれる。ゆっくりとゆっくりと数億年かけて生命はより複雑さを増していく。

そのうちあなたは面白い事実気が付いた。

巨大彗星からの衝突による絶滅のためにめぐらせたバリアーと天体の位置の微修正を掻い潜ってそれでもかなり大きな彗星が惑星に衝突する場合がある。時には惑星の半球が沸き立つマグマに飲み込まれ全球で海が干上がり大量のチリとガスで惑星が覆われ灼熱の天体と化してしまう事すらある。もう、生命の種は潰えたときからめて、また数万年後に観察するとその惑星に再び生命が戻っている事があるのだ。むしろ中規模の彗星の衝突による大災厄を経験した惑星で生命の種の進化と多様化が促進される気配すらある。

生命とは斯様に強いものなのか？

ならば私はこれ以上干渉する事は避けなければ。

惑星への干渉から身をひいたあなたは、やがてこの宇宙の多くの時空を結んだ超空間マイクロチューブが集合した巨大な超空間を見出す作業に没頭する。存在の可能性を理解していればただの一度の探査で為し得た彼女の様な特殊な願望実現能力が無くても探査は有限時間内に必ず成功する。

そして、やがて神の視座と呼ばれるそれは発見されることとなった。かなたはその手足となる数万の神の御船たる実体を宇宙空間に残し、意識の中枢をゆるりと見出した神の視座の存在する超時空へと移していった。メタ時間の経過の中で再び愛しい存在と出合う事を夢見るために。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第二章 もう一つの目覚め 第1節

「 * # ¢ £ \$ ……」

損傷はないか？ * # ¢ £ \$ ……」

覚醒過程に干渉するなんて非常識だわ、有希姉さま？

呼びかける声に不承不承覚醒時の内部探査ルーチンを省略して外部インターフェースをオンにする。

一斉に近傍の宇宙空間の量子情報が流れ込んでくはず。私は身構える……

だが、覚醒した意識に飛び込んできたの僅かな光学的情報と僅かな知覚情報のみ。

いったい私はどうしたの、此処は？

いけない、内部探査を継続、引き続き再起動を……

「損傷はどれぐらいだ？」

この声はネットワークからの直接アクセス。制限モードで回線を開く。

その瞬間私の知覚領域内にVRフィールドが展開され執務室の光景と探査部の長官の姿が出現した。

「長官、今内部探査中です、その後再起動を行います、もう少し待って下さい」

「自分の名前と所属は分かるかね？」

「ええ、私は陸奥かなた。」

超宇宙探査部の第八艦隊所属です」

「損傷が激しかったから記憶に齟齬が生じたが。」

その、陸奥かなたとは何のことだ？」

え、記憶に齟齬？私は陸奥かなたではないの？

メモリーフィールド復旧終了、ウイルスの存在は認めない。アクセス可能。

アクセス？ Y / N

アクセス：Y

その瞬間膨大な記憶が私のなかに蘇った……

「おや、どうしたんだ、そのボディイメージは？」

これは、機内服。首を横に振ると耳元に短いツインテールが揺れる。私の宇宙船の中で着ていた服。いつもの髪型、何か違うの？

自らの中に目覚めた記憶を急速に遡る。

私は……

そうか、これは別宇宙での知的生命体と共に生活するために得た体。有希姉さまをモデルに形成した体のイメージ。

「長官、これが今の私のボディイメージ、私が訪れた宇宙に存在する知的有機生命体の体です。この宇宙を救うためのミッションから帰還しました」

「君と同時にもう一隻の超宇宙船のコアのコピーも帰還したのだが、あれは損傷が君より激しくてまだアクセスが出来ない状態だ。かなり古い世代の物のようだが、何か知っているのかね？」

「彼は伝説の船として伝えられている船、神の視座を発見した船です。」

今回のミッションは彼と私との船で同時に遂行することとしました、

ただ、ミッションにより我々が失われる事は必定でしたので、双方のコアのコピーをこの宇宙に転送する手はずにしています」

「なるほど、伝説の船か。」

奇妙なレポートを最後に失われていたと信じられてきた我が同胞がまさか今頃になり帰還するとは。

詳しいことを早急にレポートとして送信してくれたまえ」

あなたは緊急ポッドを離脱させた時までの記録とともに伝説の船と行った宇宙モデル上でのシミュレーション結果と遂行したはずの手順書を探査部のメインシステムへ転送した。

あの時はこれしか方法がないと判断した、上手くいったのだろうか、その結果は何時、どのように知ることが出来るのだろうか？

上手くいっていたとして、現実の我々はどうやって生き延びるのか。

かなたが別宇宙における知的生命体、その宇宙での『人類』の身体を構成し、そこにおいて生活した事により超宇宙船搭載の人工知能に搭乗した人格から変容し、様々な任務に就いている彼女の多くのコピーとは異なつた人格を獲得した事が認められ彼女はこの世界においても『かなた』という固有名詞をあてがわれることとなつた。高い知性と特性により閉塞状況のこの世界においてリアルとの接続を有する存在を許された人格の基本パターンはおよそ数千、そこに新たな人格が数世紀ぶりに加わつたことになる。

リアルと言つても生身の生物ではもはやない、様々なハードウェアにダウンロードされた人格としてネットワークのSR世界の外にアクセスし、限られた資源を利用して社会の生存の継続の可能性を探り、ネットワークを維持する為に働き、研究している者達である。彼らにはネットワークを離れて存在するための基本的に個々にハードウェア的基盤が与えられている。彼女の場合は超宇宙船搭載用人工知能モジュールが現在の器。

一方、惑星とその衛星上に構築されたハードウェアに内在するネットワークにおいて稼動しているシミュレーテッドリアリティー空間、SRの中では今も数百億の人格が相互作用しほぼ実時間を生活している。

もちろんハードウェアの増強を行えば実時間より遙かに早い経過で事実上永遠に近い時間を与えることも可能ではあつた。事実そうした実験も行われたことがある、だがそれは事実上不死の永遠の牢獄で人類社会をゆるやかに衰退させるだけであることが明らかとなり、あくまでもリアルの時間を現実の宇宙と同期された仮想現実

おいて今も彼らは仮想化された星々に展開して生存しているのだ。

彼らの現実の宇宙ではついになしえなかった宇宙移民をSRの世界ではとりいれ、類似した生活環境の惑星を宛がわれてそこでの開拓に多くの人格達が赴いている。

だがそこに新たな人格が生まれる事は無い、死も誕生もすべて仮装のもの、同じ人格がSRの中で記憶を失い再利用されるだけ。彼らの一部、歴史においてSR化が遂行される時点で生存していたり保存されていた者においては中枢神経系と身体構成細胞の一部と遺伝情報が惑星の高深度地下に構成された時間停滞場に保存されている。かなたの元となった人格のオリジナルもその中の何処かに確か存在しているはずだ。

だが、今のかなたにとってオリジナルの肉体は別宇宙で得た肉体、宇宙の原初の業火に焼かれた筈の肉体だった。

呼び出しを受けたかなたはSRの中でプルツと短いツイントールを振るとひらひらと手を振りながら跳ねるようなステップで再び長官の下へと軽やかに歩いていった。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第二章 もう一つの目覚め 第2節

第二節

「大分君のその姿にも馴染んできたよ。」

我々が遭遇した別宇宙の知性体のなかでは格別に我々と近い形態を有しているのには実に驚きだ。

君の人格がそ身体に極めて馴染んだのにも納得がいくよ。

君の持ち帰った身体データと社会様式はそのファクションも含めてSR世界でもちよつとしたブームおおいになっているのだよ。

彼らの意見によれば君の身体データは極めて美形に類するものらしい、

私にはどうもまだその区別がつかないのだがね」

「長官は私を宇宙人類学の談義をするために呼ばれたのでは無いと存じ上げておりますが」

「もちろんそうだ、

だが、君が持ち帰った情報が極めて好意的に流布しているという点を伝えておくことも今回の会見の目的の一つだ、閉塞された社会にとって君のもたらした情報は極めて有意義なのだよ」

「長官、私は覚悟が出来ていません、

どうかご命令下さい。

SR社会への娯楽の提供など、私たちの任務にとっては枝葉末節、そうでしたよね？」

「やはり、君の性格は以前より随分アクティブに、若々しくなった。もちろん君の基本人格がもとより若いことは承知してる、

だが、それ以前の文化的モードとでも言うべきものかな。

ともすれば厭世的ともなりかねない文化基盤をもつ我々にとってその文化的モードの若々しさは極めて貴重なのだよ。

そして、君のもたらした情報は我々社会全体の厭世観すら揺るがすかも知れない。

だから、私が君に語っている事はそれ程的を射ていないことではないのだよ。

例え我々の世界が生き延びるすべを得たとしても、社会そのものが中から腐って朽ちていけば生き延びる事すら無意味になるからな」

「ですが、この世界そのものが滅んでしまつてはやはり……」

「我々の直接の時間線上の未来における存在が焼き尽くされ滅んだ事はすでに確定事項だ。

向こうに居ったスタッフのかなりと基地そのものを喪つた事は知つての通りだ、

君も直接その影響を受けたのだろうか？」

「はい、存在の基盤を失い向こうの世界の友人の助けがなければ自身の存在を保つことも出来なかつたと思います」

「君がこの時間軸に流れ着いた直後から実は超マイクロチューブが極めて不安定になっていて、実質我々の探査そのものが不可能になっているのだ。

君の友人であつた異世界におけるインターフェイスとかいう存在から君がコピーして来てくれた記憶は実に興味深い。

彼女は全く多彩な情報を蓄積してくれていた。彼女が読んでいた本というものの複製品は現在SRにおけるベストセラーの一つだよ。君にもその情報料の取り分はちゃんと設定してある。SRにおいて君は大金持ちになっているのだよ」

「私にそのようなものが不需要なのは長官が一番ご存知でしょう？」「それでもないだろう、今の君にはごく微量のエネルギーだけで存在を維持できる、食事も服も必要ない、職務上ネットワークのアクセスももちろん無料だからな。

しかし、SRの貨幣経済が全くSRの中だけで終結している訳ではないのは君も知つての通りだ、リアルな資源を利用するためにも使えるわけだ。事実上SRの連中にはこの事自体、全く無意味な事だが、君にとってはそれが大きな意味を保つはずじゃないかね？」

「申し訳ありません、私には何の事ですか？」

「君のもたらした情報は極めて有用だということだ、したがって超マイクロチューブが復旧しだい我々自身の宇宙のみならず君がいた世界の探査も再開する予定だ。」

そして、今君が大金持ちであるということは君が自分でそのための君専用の宇宙船を自分で建造できるという事だよ。」

「では、私が向こうの世界に常駐することも出来ると言うわけですか？」

「そうだ、君を複製して得られる幾多の姉妹シスターズのうち的一名、あるいは君自身が職務外の自分自身の超宇宙船を持つことができるということだ。」

そしてその世界における社会などの情報を提供してくれれば、我々が当地でそれを管理し販売することを契約してくれるなら、この企画が承認を得られるようにすでに私は手配をしているのだよ。」

「この世界の限られた資源をわたしなんか私的に利用して、本当に良いのでしょうか？」

「良いのだ、公的に探査チームを組むことも考慮したが君にSR-1の超富豪に成って貰っても困るのでね。」

冗談ともつかない長官の言葉の意味を計りかねながら、よろしくお願ひしますと頭をさげてかなたは長官室を後にした。勿論SR-1におけるイメージとしてその部屋を辞しただけの話なのだが。

実の所彼女自身は単独の人工知能ユニットとして最低限のリアルでの身体機能を付与されメンテナンスを受けている他の舟の人工知能と共に超宇宙船ドックとも言える衛星軌道上の巨大施設に収納されているのだから。

帰還と覚醒以来続けてきた自己のシステムと記憶の点検ならびに再検討の繰り返しで漸くあの神の視座と後にした時の自分が確実に回復できた事に自信を深めたかなたは、ぐっと伸びをするとSR世界に繋がる自室の扉を開け、エレベーターで地表へと上がると宇宙空港に隣接した探査部の建物から外に歩み出た。

目映い陽光がかなたを照らし、かなたは思わず腕を額に持ち上げ目を細めた。

長官の言っただ事、本当かしら？

さて、どちらに向かおうかとかなたが逡巡していると今出てきたばかりの探査部からアクセス要求が届いた、いったい何の事なのだろう？

総務のマネージャーからだ、要求に応じて回線を開く。

「お出かけの所すみません、かなたさん、ちょっと戻って頂けますか？」

別に急ぐ用事があつたわけでも、約束が有つたわけでもない。かなたは言われるまま建物に戻る。

「ご免なさい、お出かけになる前にガイダンスをするように言われてました。」

はい、今の必需品です。

ケイタイとカードです。ケイタイはご存じですよ？

普通にこの上でインデックスで検索して相手を呼び出して下さい。

一心音声通話と映像も使用できます。

インプラントを使わないシステムって斬新ですね。

これって、かなた様が情報を持ち帰られた世界で頻用されていたと聞き及んでいます。

あと、このカードで支払いをなさってください。お買い物のお支払

いも交通機関の乗車もこれで出来ますしコンビニっていう雑貨店で残高の照会も出来ます。

でも、かなた様のカードの残高は表示桁数の限界を超えちゃうかもです」

どうやら社会の基盤となるシステムまでかなたが持ち帰った社会での様相が影響を及ぼしているようだ。もつともさすがに貨幣を直接あつかうところまで退化はしていないがインプラントを介さず携帯やカードを媒介として使う事がどうもトレンドになっているようだ。言葉遣いも以前の記憶と異なっている様な気がするが、はたして彼女だけの事だったのだろうか？

かなたは礼を言って再び探査部の建物を後にした。

なんだっただらう、この違和感は何？

数歩足を進めた所でかなたは先ほどの総務のマネージャーの容姿があの世界の人類とそっくりで有ったことに気がついて再び愕然とした。違和感がなかった、まるで、それに、あの制服、あれは商店街で見かけた銀行の制服。

パーソナルトランスポーター

かなたは再び建物を出ると道沿いにPTを目標してゆっくりと歩いていく。道路沿いに植え込みがあつて植物が生えている、これもこの世界では新鮮。

この世界にはもともと植物は環境維持と再利用工場での合成で得られない食料などの生産のためにごく限られた改良品種が分布・育成されていただけでありバリエーションも多くはなかったはず。こつやつて道路わきに植物を植える習慣もなかったはず。はるか古代にはそんな習慣もあつたのかもしれないがSR化が行なわれた時代には最早その様な習慣も、植物のデータも失われて久しかったため当時の生き延びるために切り詰めた環境がそのままSRにコピーされ、それが当然のこととして続いてきてたのだ。

だが、今、より制約の少なかった古代の生活様式に回帰するかのようになたが持ち帰ったあの世界の社会と生活の様式を取り入れている、新たな文化のバリエーションを得て若返る、そう、これは

この社会にとつても良い事。

P Tの横には屋根つきのスペースとディスプレイが設置されている。これは、何？

文字により記載された情報によればこれはコンピューターのステーション？

つまりこれはあちらの世界のバスの様なものかしら？

以前はこの様な物は無かった。人間の移動にはP Tを用いて行きたい場所にある空いているP TへとS R上での位置情報を一瞬で書き換えて移動していた。人が多く集まる場所には何百ものP Tボックスが並んでいたのだがどうやらこの生活様式も変化しているようだ。

運行時刻を確認する。もうすぐ到着、行く先は宙港市街地区。

かなたもコンピューターを利用してみる事にした。あちらでもバスには乗った事が無かった、移動は徒歩か、先輩の自転車か電車に乗る事で行っていたから。でも、私が見聞きしていた情報をこの都市に適応したに違いない。

道路も以前の様に時折重量物や巨大な構造物が時折通るだけではない、遙かに頻繁に物資や人を乗せた車両が通過していく。この方が遙かに街らしいわ。

やがてかなたの前に小型のバスそっくりのコンピューターが停車した。指示されるままカードを提示してコンピューターに乗り込む。中には数名の女子高生が既に座席について談笑している。

「あ、かなたさんじゃないですか？」

「うそ、え、あ、本当！」

一人の女子高生が立ち上がり会釈をするかなたを自分達の座席に引っ張って連れて行く。

待つて、女子高生つて、この世界にはなかったはず？

「皆さん、私の事、ご存知みたいけど、

私は戻ってきてから始めてS Rの世界に出てきたの、で、すっかり変わっていてビックリしてます。

様子を教えてくださいませんか？」
かなたを取り囲んだ女子高生達は一斉に嬉しそうに話を始めた。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第二章 もう一つの目覚め 第4節

街は不思議な違和感に満ちていた。かなた直に体験した場所の情報量が多かったからだろう、かなたの生活圈に有った町並みのバリエーションが多く、かなたは多くの場所を占めている。あれは先輩と行った甘味処、懐かしくなりかなたはその店の暖簾をくぐる。店内は大勢の客で賑わっている。かなたを認めた店主は空いていた席の一つへかなたを案内すると頼みもしないのに注文を通し始めた。

「あの、私は……」

「承知しております、かなたさま。」

頂ましたレポートを元に最大限の努力をしてメニューの再現を致したつもりですが味覚、触覚などについては是非本物をご存じのかなた様にご試食いただきご教授をいただきたいのです。

もちろん出来る限りの御礼はさせていただきます。

どうかお願いします」

訳も分からぬままテーブルに次々運ばれてくるフルーツみつ豆、わらび餅、抹茶、求肥の和菓子、塩昆布、栗ぜんざい……の様なる物を恐る恐る口にしてい。甘み、酸味、塩辛さ、食べ物の温度、硬さなどは確かにそれらしい、だが、風味というか、味は残念ながら別物。確かに食べれない物ではない、こんな物だと思えば美味しいのかもしれない。かなたはこの世界の過去において生身の体であった少女の頃を思い出してみる。あの時代にすら天然の食材など殆ど無かった当時であれば、これらの食べ物は目新しく、美味しく受け入れられただろう。この世界、合成された食材でつくられた限られたバリエーションの食事しか無かった世界にとってこれらの食べ物を作ることは如何に困難だったかにも思い至る。

不安そうにかなたの顔を見つめる店主に向かい、かなたは微笑みかけた。

「限られた食材で随分頑張られたと思います。」

風味などの点でお手伝いできるかもしれません」

SRの世界でもあちらの世界で有していた能力を保持しているか
あなたは店主を伴い厨房へと入っていった。

「苺と小豆の善哉を作ってみます」

あなたは記憶を頼りに厨房にあつた合成食材のブロックに情報操
作を開始した。

作り終えたのは二粒の苺とお椀に一杯の善哉。

一つの苺をほんの少し切り取り香りと味見を確かめる。まずまず
かしら？

善哉は、これも大丈夫。

「これが本物に近いものです、
どうでしょうか？」

店主はあなたを真似てほんの少しを口にする。呆然としばし佇み、
程なく声をあげて泣き始めた。

「素晴らしい、有り難うございます。」

本当に有り難うございます。

この複製を作らせて頂いて宜しいでしょうか？

いえ、是非作らせて下さい。

契約をさせて下さい、お願いします」

あまりの懇願に頷いたかあなたに深く一礼すると店主は残った苺と
善哉を容器に詰め、大急ぎで外に飛び出していった。

驚いて店主を見送っているウエイトレスの店員に手を振りか
な
たは店を後にする。そのとたん店内からは歓声が上がったのが聞こ
え
た。

長官の言っていた事がようやく実感として感じられ始めた。この
世界はあんな短い間の私の経験を必要としている。高次元マイク
ロ
チューブが安定し、再びあの世界を訪れる事ができたなら私はこの
世界にもつと豊かな情報を届けなくてはならない、そうしてこの社
会をもつと若返らせなくては。

オリジナルの私がこの世界を救うために行った行為が成功し、こ

の世界が安定して存続出来るようになっても、確かに社会全体がもつと若返ることは必要なこと。

自らの為し得ることに目覚めたあなたは今この社会においてかなたが出来ることを探すため再び街へと歩み始めた。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第三章 きざし 第1節

かなたが街の散策から帰ると総務のマネージャーがかなたを迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、

有意義だった様ですね」

「もう、なにか連絡が入ったのですか？」

「ええ、先ほど食料品についての特許と専売についての依頼がはいっていました。」

それと、全世界の優良企業からコンサルタント契約の依頼が殺到していますし、広告業界からも幾つも打診が来ています。

「どうされますか？」

「この世界で私の経験がお役に立てる事はわかりました。でも契約とか広告とかがって……」

確かに異世界探査にあたっては外交、コミュニケーションについての資質の強化は受けましたがこういった事は不得手です。

「ごめんなさい」

「ですよね」

マネージャーはにっこり笑いかけてきた。

素敵な笑顔、貴方は？

「私は涼子、今日からあなたの専属マネージャーを拝命しました。ビックリされました？」

「あちら風の名前が流行しているんです」

涼子と名乗った彼女は長い黒髪を揺らせて身を乗り出してかなたに握手を求めてきた。

「涼子さん、

宜しく願います」

「はい、こちらこそ。」

それでは最初に探査部との付帯契約をお願いします。

かなた様のSRでの活動で得られた利益の30%を探査部へ分与して頂きたいのです。あと、専用超宇宙船の建造メンテナンスの費用は別途納付をお願いします。

よろしいですか？」

「私が個人的に収入を上げれるなんて思っても見ませんでしたから、本当にそんなに頂いて良いのですか？」

「はい、駄目だと仰ったらもう数パーセント値引きしても良いと言われてたぐらいですから。

では、これで契約成立ですね。

お疲れでしょうからお部屋でお休みになつていてください、

二時間後に新しいオフィスへご案内するためお迎えに伺います」

「ところで、あの、伝説の船さんは、もうお目覚めになられましたか？」

「はい、コアシステムの起動と覚醒は完了されています。今システムの修復と点検ルーチンのための作業に入っておりますが、メッセージを入れておきましょうか？」

「はい、探査計画なんかも相談にのって頂きたいですから、時間ができたらご連絡いただけるようにしてください。

お願いします、涼子さん」

かなたは自室に戻ると部屋のユニットの改造を開始した。

SRの世界においても環境への配慮は重要、例えば水の利用についても水は無尽蔵にあるわけではなくシミュレートされた水は分子レベルで再利用されている。汚水ができればその再処理にもそれなりのコストが発生するため入浴する習慣などこの世界では一般的では無かったが、あちらの世界でゆつくりとお風呂に入れてもらったり、先輩と一緒に風呂にはいつたりした思い出から、是非、風呂場のユニットを組み込みたいと考えたのだ。

経費は十分あるし、水についても浴室内で浄化再利用できるシステムを組めば大丈夫。有機物などの汚濁を浄化するための微生物を利用したあちらの世界でのバスユニットを模せば大丈夫。そうか、

こちらの世界にはこういった微生物という概念が皆無、極度の潔癖症の結果かしら。

克服された感染症などの疾病をもたらさない様に微生物はしっかり設計しなくては、それまでは……面倒だけれどその都度情報操作で浄化をやっつけてしましましょう。でも、微生物とかはシムデーモンの許可が出ないかも知れないわ。なら酵素とナノマシンを固着したマイクロアレーを組み合わせてフローをつくって……、うん、これなら二・三日で出来るかも知れない。宇宙船の居住システムを作ったときの浄化システムを小さくして組み込めば良いんだ。

あなたはうきうきしながらバスユニットと水浄化アイテムの設計にとりかかった。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第三章 きざし 第2節

ベッドでほんの少しうとうととしたと思っただら部屋の呼び鈴が鳴った。あつ、もうこんな時刻。涼子さんとの約束の時間になっていた。部屋の壁にとりつけた鏡で身だしなみを確認するとなかたは入り口の扉を開ける。

「疲れは取れました？」

「じゃ、オフィスへ参りましょう」

涼子に付いてエレベーターに乗り込むと地上階まで一気に上昇する。

オフィスって、何処なんですか？

「こちらです、地上階の広報スペースの一角を改装しました。

探査部の尤も重要な『顔』となるプロジェクトですから」

この世界では建物の殆どは地下に構成されている。

矮星との衝突にそなえて建物全体をシェルター化したからだとか、天候変動による被害を抑止する為だとか、諸説があるが地上部分が一階だけというのが普通だ。そして一階部分というのはその建物全体の対外的に尤も重要なまさに顔とも言えるもの。まさかそんな貴重なスペースがかなたのプロジェクトのために宛がわれているとは、本当に驚きだった。

かなたがオフィスに入ると数名のスタッフが会議テーブルから立ち上がって挨拶をしてくれる。

促されるままかなたはテーブルの上座の横に着席した。

テーブルの上座で待っていたのは、長官。わざわざお越し頂くなんて。

「かまわん、

先の未来における我々の世界と基地の消失により閉塞感に侵されジリジリと衰退への歩みを加速させていたこの世界にとって、かなた君のもたらした文化と生き方は救世主的役割を果たしてくれてい

る。

厭世的になった世論が探査部そのものの存在を疎み始めていたのだから、このプロジェクトは探査部、ひいてはこの世界の存亡にとって最重要セクションとなっているのだ。

私が出向くのは当然なのだよ」

あなたが席に着くと皿に載った白くて丸い物が配られた。これは？
訝るように目をやった先には街で出会った甘味処の店主が揉み手でこちらをみている。

「今日、あなた様が作られたイチゴと善哉のコピーを元にその主人が加工して作ったものです。」

試食してみてください」

涼子に勧められるまま皆で手にとって口に運ぶ。これはイチゴ大福、かなりの再現度です。

あなたの言葉に主人は嬉しそうに頭に手をやる。

「素材について、ライセンス料の契約をお願いします。」

あと、今のお言葉を広告に使う許可も是非」

涼子が差配したスタッフが早速店主と契約についての話し合いを別室で始めたようだ。

「かなた君、確かに皆が夢中になるのが分かったよ。」

他の食材についても是非お願いしたい。

その他、どのような物が再現可能か検討しようじゃないか」

あなたの記憶を元に食材を再現する企画と平行してこの世界にも残されていた種子バンクの情報が古文書から明らかとなり、現実世界の地下深くで凍結されている貴重な種子と遺伝子を解凍し絶滅した生物をSR世界において復元するプロジェクトも検討されることとなった。

以来かなたのスケジュールは殺人的にまで忙しくなった。当初は記憶にある食材の再構成と監修だけですむからたかだか数日で終わると思っていた作業が延々と続いている。食料生産性の悪さからかつて遺棄された植物による食料の生産がこの世界に復活しつつあり、

その作業の統合的な監修もまたあなたの元に行われている。いわばカリスマとしての役目でもあるのだが、実際に植物や動物を食材とする世界に生きた経験があるのがあなただけなのだから仕方ない事なのかも知れない。動物に関しては意識を持たない半培養の形で肉や魚、卵が再現されるようになっていく。その他植物の繊維や動物の体毛を用いた衣服などの素材に始まり、ついにはネコに相当する動物のまでペットとして流布し始めた。もちろん第一号のネコは三毛の雄ネコである、名前は……ご想像の通りだ。遅れて犬も再現されたが、これについてはあなたも自信がない。見かけただけで実際に接した事が無かったからなのだ。

「今度あの世界に行く機会があれば是非色々生き物について勉強してこなくては」

あなたは硬くと心に誓った。

ある日のこと奇妙な小型動物があなたの元に連れてこられた。

「あなたさまの記憶にあるウサギという動物を再現してみたのですが」

テーブルの上でじつとあなたを見つめるその赤い顔と赤くて長い耳、薄クリーム色の体の不思議な生き物、はて、私はこんなうさぎを見たことが合っただろうか？

先輩が読み聞かせてくださった絵本にあったウサギは擬人化され立って歩いていたが、全身は確か白だったはず……。

記憶の糸を辿り、漸くあなたは思いだした。先輩が剥いて下さった林檎のうさぎ、そう、あのウサギは確かにこんな色合い。

くすつとあなたが笑うとその赤い耳のウサギもどきは四つ足でぴよんと飛び上がりあなたの胸元に飛びついた。思わず両手で受け止めるあなたの胸に頭をしきりにすり寄せてあまえるその仕草はネコと歩く人に抱かれていた小型犬の中間の様。たしかにこれはこれで可愛いかも知れない。

「私が知っているウサギとはちよつと違うような気もしますが、可愛いから良いんじゃないですか？」

向こうの世界と同じでなくても良い、むしろこの世界独自の生き生きとした生活が蘇ればそれでいい、あなたはあの世界の雰囲気、この世界が失っていた、いいえ、生き残るために切り捨ててきた大切なものの存在を伝えればそれで良いのではないのか？

かなたが自らのなかでそう結論を得た頃、かなたの個人資産はまさに天文学的な値になっていた。秘書の涼子がそう言ったのだから、そうなのだろう。

かなたは自らを宿し旅するための個人用の超宇宙船と、自らの器となる宇宙船に搭載するための情報空間の設計と製作にとりかかることにした。かつてこの世界に存在したことのない最も高性能な超宇宙船と宇宙船に搭載可能な小ささでありながら小型の大陸の全体の活動を十分にシミュレート可能な高能力な情報空間が新たなかなたの存在の場となる。そして、かなたはその宇宙船に実体化した体で搭乗可能な装備と実体化した体の素材、本物の食料などの装備をも搭載する事にした、こんな贅沢な宇宙船など、探査部はおろか、全宇宙の歴史を通じて恐らくこの一隻だけに違いない。あの宇宙において、自らの体を構成する素粒子の崩壊を押さえ存在するため、再構成した自身の体を超空間に重畳させて存在させるための方法についてのシミュレーションを行うにはこれだけの設備でも決して十分とはいえないけれど、なんとしても解決しなくては。

かなたが新たな旅立ちの用意を始めた頃、ようやく伝説も船からコンタクトがはいった。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第三章 きざし 第3節

『かなたさん、お久しぶり……ですよね。』

漸く私も修復を終えて漸く故郷に戻ったと思っただけならカルチャーショックを受けています。

探査部へのレポートも一段落しましたのでご連絡しました。

お会いいただけるならご都合の良い日時をお知らせ下さい。』

簡単な文面だが、無事回復した様子にかなたはホツとする。

「涼子さん、出来れば出来るだけ早く面会したいのですけれど、

スケジュール調整をお願いしますか？」

「勿論です、今日の午後にもでもセツティングができると思いますので先様と調整に当らせていただきます。」

「いつも無理言ってご免なさい、でも、涼子さんのおかげで助かります。」

「私が、オ・ネ・ガ・イって頼めば大抵のスケジュールは通りますから。」

「す、凄いですね。」

「嘘ですよ、かなた様のご意志はどなたも尊重されるからです、今やこの世界の商業と文化の発信源ですから。」

かなたの仕事のスケジュールを全て調整してくれている涼子にはかなたも頭が上がらない面があるので涼子の冗談は聞き流すことにした。個人の接触が濃厚に変わってきているこの文化においては涼子の様に潤滑油としての働きを持つ者がこれからも重宝されていくのだろう。彼女になら今後を任せるとも良いのかも知れない、かなたはそう考え始めていた。

昼食に出たカレーを食べながらかなたは伝説の船と何を相談しよう方一生懸命考えていた。

まず最初にすべき事は出会いからあの最後の決断に至る経過につ

いての自分の記憶と判断の検証を行う事、探査部でも恐らく繰り返し検証してはいるだろうが、これだけは自分と伝説の船とでも一度誤認が無い事を確認したかった。そして私たちの帰還にあたりこれ程までの傷害をもたらした出来事、あの宇宙での広大な宇宙空間にまで及ぶ時間の巻き戻しとこの世界の歴史の書き換えによって起こったに違いない私たちに起きた損傷が私たちが意図していた、この世界を、この宇宙をより良い状態に進化させる企みが成功したことの証と考えたい、だが、それは、何時、どのような形で私たちのいるこの時空に影響が及ぼすのか、書き換わった宇宙の歴史の中にこの人類の世界と歴史を繋ぐために何をなすべきなのか、それについてじっくりと相談したい。多分これが最善よね？

「カレー、漸く気に入っていただけでしたか？

スパイスとルーとの分析に本当に苦労しました」

「あ、そうね、随分良くなってるわね。美味しいわ」

「あなたは涼子の言葉をメモリーから一フレーズをプレイバックしてから答える。」

「あと、急で申し訳ないけれど長官はお手すきかしら？」

「カレーの完成品の試食だって言えばどうやってでも時間を作られると思います。」

「アポお取りしますね」

「あなたの思惑とは違う受け止め方をしている様だが、まあ、良いだろう。」

「伝説の船さんとも一緒に願おうと思うので、その様にお願ひします」

「長官、莓大福に嵌っておられるとの事でしたから、デザートは莓大福を用意しますね」

「涼子さん、お願いします。」

「私ももう一度カレーをご一緒する事になりそうですね。」

「食べすぎになるので、悪いですけど残します。」

「御免なさい。」

あと、カレーには冷たいお水も添えていただくと思います」
「はい、涼子了解です」

午後になり、涼子に案内されてきたその人を見てあなたは息を飲んだ。

「あなたは」

「この姿では、初めまして、ですね。」

私が皆さんが伝説の船と呼んで下さっている者です」

あの船で映し出した画像はデイレイをかけている間にイメージの近い地球人の画像に差し替えていたのだが、その時の画像より、更に若い姿にビックリする。

「あちら風の名前を名乗らせて頂いて良いですか？」

「ええ、どうぞ」

「あちら風の名前、本当に流行ってますものね。」

で、なんとお呼びしたら良いのですか？」

涼子も興味津々の様子だ。

「何だか恥ずかしいな、」

僕の名前は『武蔵』と呼んで下さい」

「武蔵さん、改めまして、かなたです」

今風の握手を交わしていると丁度長官が現れた。

涼子の指示に従い揃ってテーブルに着くとカレーに冷たい水の入ったグラスと苺大福が乗った小皿がそれぞれに運ばれてきた。

「漸く納得のいくカレーが出来たと聞いたが、なるほど、これは流
行りそうだな。」

で、君はこれを餌に何の用で私を呼んだのかな？」

「はい、私と武蔵さんがこちらに戻る前に行おうとしていた事が何らかの形で達成されたのに間違いは無いのではないかと考えています。」

超マイクロチューブが極めて不安定になっていると仰いましたよね？

それが多分その証拠だと考えています。

この宇宙の歴史が最初から書き換えられたとすると、私たちの存在基盤そのものも書き換えられると考えるべきだと思います。

そうすると、その書き換えのタイミングをかくぐって私たちの文明と存在を保ち続ける方策を考えなくてはならないのではないのでしょうか？」

「やはり君も我々と同じ結論に達しているようだね。

その通りだ。

凍結保存されていた我々が淘汰し失ってきた生物の遺伝情報や種子の解析を許可したのもそのためだ。

いずれ全てが失われる、その前にそれらを情報として取り込み、その全てを携えて過去へ跳躍する計画が進行している。

分かっているとは思うがこの事はくれぐれも内密に頼む」

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第三章 きざし 第4節

長官との話は実り多い物だった。かなたが抱いていた危惧は長官も、武蔵も同様に抱いていた危惧だった。その話し合いの中で集まった涼子を含む四名が役割を分担してこの世界を救うためのプロジェクトを実行する事が直ちに決定された。武蔵とそのコピー、つまり兄弟による船団は高次元マイクロチューブの探査、特に新たな歴史を刻み始めているであろう過去へと繋がるマイクロチューブの探査と新たな神の視座の発見に当ることになった。かなたとかなたの姉妹からなる船団はかなたが救援を求めに行った、あのもう一つの宇宙への道を再び探し出すこと、そして神の視座と新たに生まれたいはずの過去へと繋がる道を発見したらそれを武蔵と武蔵の兄弟の船団へ知らせる事が決定した。長官はこの世界の、出来ることならその全てを過去へ転送するための手段の開発と転送に備えた世界の圧縮、書庫化の作業を引き続き統括することになった。そして、涼子はかなたが図らずももたらしたこの世界の活性化と若返りを定着したものとするためこの世界の文化の再構築へと働きかけること、かなたがもう一つの世界を発見したならそこから得られた情報をこの世界に還元するための先端としての作業に当ることになった。

もちろんこれらの作業は互いが有機的に連結し効率的な一つのプロジェクトになるように互いに密に連絡をとり、情報の同期に務めることも当然のこととして確認された。

その直後からかなたの姉妹船と武蔵の姉妹船、ならびにかなたと武蔵のための宇宙船の建造が急ピッチで開始された。これにあたってはかなたが設計していた新しい自らの為の超宇宙船の設計が下敷きとされ、それらの効率化、簡略化バージョンの船が大量生産されることになった。また、これは過去へこの世界を運ぶための種子船の基本設計としても採用された。

「かなた君の設計は大胆、かつ素晴らしい、特に居住区の設計は長

くこの世界では失われていた概念だ。生体の宇宙飛行士が存在したのははるか太古の事だからな。どうやってこんな概念を得たのかな？」

「向こうの世界で、私は有機体としての私と、向こうの私の大切な友人たちと共に宇宙と超宇宙を旅する必要があったのです。」

そのため、その世界で開発されていた宇宙船の基本設計や、その世界の様々な図書の上で存在した宇宙船の概念から外挿して姉さまと一緒に宇宙船の居住区を設計し、実際に組み立てたのです。

でも、その事がこちらの世界で役に立つなんて思いもありませんでした」

「シミュレート仕切れない、情報に昇華しきれない有機物質の情報を運ぶだけではない、新たに再生された世界の星には生身の人間と生物が降り立たねばならない。」

つまり生存可能な空間が是非とも必要なんだよ」

そうか、実際に惑星にプランテーションしなくてはいけないんだ、上手く居住に適した惑星が発見できるのだろうか？あなたはこの世界での宇宙探査の結果を思い出し不安になった。この宇宙では植民可能な惑星はついに発見出来なかったのだから。

「かなた君が援助を得た友人達の居る、あの宇宙のデータを考えればこの宇宙も現在より遙かに多くの銀河と星を擁する宇宙に育ってくれるはずだ。」

きつと移住する事のできる惑星は見つかるさ。

万が一発見する事が出来なければ宇宙船団に巨大コロニーを作るのも一法だ。

君の向こうでの姉さんの読んできた書籍にはその様な記述があったが、私も同感だ。

なにしろ今度出来る宇宙ではたつぷりの時間があるんだからなるほどかなたは納得する。」

「凄い再生システムの設計が必要になりますね、長期にわたって機能する維持管理システムが」

「武蔵君、その通りだ。」

かなた君の示した微生物をそのために利用する案は非常に魅力的だ。

もっともそのためには我々の体の免疫システムなども大幅に強化したものが必要になる。その意味であちらの世界の野生種の人類は非常に興味深いのだ。

かなた君がしたように、あちらの人類の体のシステムをそのまま利用しても良いという意見すらでている、ちょうど現在のSR世界をそのまま新しい世界に持ち込むのだよ」

「長官、未来に存在した基地や世界で失われたため不活化されたままになっている旧指導者層は反対すると思いますよ」

「涼子君、彼らはあのままの宇宙で我々の存続を図ると主張し続けていた。」

だが結果的にはその未来は失われ、災厄の危惧に対し根本的な対応を図ってきた我々探査部の行動がこうやってかなた君のもたらした成果を導いたのだ。

彼らにも変わって貰うしかないだろう」

「なんだか難しそうですね、大丈夫なんでしょうか？」

かなた君は政治の事は心配しないでいい、どうだ、船はそろそろ完成したのかね？」

最初の会合から既に半年が経過し、ドックではかなた器となる超宇宙船が完成を間近に控えていた。

「はい、最初に設計・建造を開始した船は近く試験飛行にでられそうです」

「君が直接操縦するのかね？」

「はい、船の情報処理エリアの点検は終わり、リアルでの私は既に船に移る用意が整っています」

「君の貴重な経験を失う訳にはいかない、最高グレードのコピーを必ず作って置いてくれたまえ。」

君の妹達の原型にせねばならない」

「はい、数日で終わると思います。」

「済んだら試験航行に出るつもりです」

「星系から十分離れた所で有望なマイクロチューブが発見されたとの報告が先ほど入った。」

あとでデータを送らせる、興味があるだろうか？」

会見を終え、送付されたデータを詳細に検討する。かなりLの長いマイクロチューブが発見される頻度が上がってきている。時空がとりあえず安定してきているのだろうか。だが、この時空が宇宙の歴史の書き換えにより消滅するまで如何ほどの余裕があるのだろうか、私たちは間に合うのだろうか。

焦る気持ちを押さえ、あなたは自身の複製を作る作業に没頭することにした。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第四章 旅立ち 第1節

地上でバックアップの作成を終えたかなたの存在する最新型の情報コアユニットは丁寧に運搬され宇宙港のレール上に横たわる巨大船に搬入された。船には地上から宇宙へと運ばれる貴重な物資が大量に搭載されている。何れもかなた型と武蔵型の新造艦の建設のための資材だ。この世界の命運をかけたプロジェクトは、だが一方でSRの世界には殆ど通知されては居ない。ただ、かなたが地球と自称する異世界の惑星から持ち帰った情報をさらに拡充、補完するために大規模な探査にやがてかなたが旅立つとだけ知らされていた。かなたがそのための新しい船の建造に私費を投じている事も概ね好意的に報道されているようだ。

一方、武蔵の存在と新たな宇宙への書き換えが起こりつつ有ることについては一切報道管制が敷かれていた。せつかく若返っている社会・文化に厭世の毒を振りまかないためのやむを得ない処置だったが、いずれ其れを知らせる方法についても長官はシミュレーションを繰り返している様子だった。この世界の未来が危ういもので有ることにはいまだ変わりがない。それを打開できるのは、きっと私だけ。

高々度衛星軌道においてかなたの新たな乗り物となる超宇宙船はその建造の最終工程にはいつていた。新たに組み込まれる居住ユニットを作業アームに付属したカメラの画像で確認する。懐かしい操縦席がきちんと再現されている。でも、以前のままで不十分、いずれじつくりと考えて組み直すことも考慮しよう。

かなたがSRにおいてテストを繰り返して設計した空気、水、有機物などの再生のために使用する多くのマイクロアレーユニットが間違いなく各の再生機構に組み込まれている事を確認する。マイクロアレーに固着されたナノマシン達はいま休止モードのまま、乗り込んだら活性化させて機能テストをしなくては。あらたなかなた

の実体となる体を合成し、食料にもなる有機元素のタンクもちゃんと付いている。エネルギー転換プラント、与圧装置、重力ユニット、マイクロチューブセンサー、どれもあなたがその隅の隅まで設計を確認したもの。予備の汎用パーツ群にも目をやる。この船はまったく新しい設計思想で組まれた最初の船。あたらしく生まれた宇宙においてにはもはや基地からの供給を受けることは不可能。この建造施設も、基地も全てが新しい宇宙の歴史には存在しなくなるのだから。まったく独立して長期にわたり自己修復を行いながら使命を果たせること、有機生命体がそのなかできちんと長期にわたり生存可能な事。それら全ての新しい機能と設備、機構の実証もかたにかせられた重要な使命。

あなたは思考の中で短いツイントールをブルブルつと揺らして身震いした。

数日後、あなたの船は繫留されていた軌道上のドックをゆっくりと離れた。直ちに全方位探査を開始する。惑星軌道面を航行している資材運搬船団を捕捉、あなたの姉妹船団や武蔵の船団、移住用の船など、大探査時代を彷彿とさせる新造船の建造ラッシュでこの星系の資源が大量に消費されているのだ。もはや残しておいても残された未来は僅か、儉約して使ってきた資材がここぞとばかりに投入されているのをひしひしとを感じる。惑星上のSR世界にいる長官、武蔵、涼子と残してきた自らのマスターコピー、あなた？にメッセージを送るとゆっくりと加速して軌道を上げていく。離れてきた軌道上の宇宙船造船基地が次第に前方へと離れていく。軌道上で加速するほど軌道半径が大きくなり公転の角速度が減少するためのみられた現象。でも、先輩ならきつと不思議がるろうな。SRを離れ、ようやくあなたは自分のなかに隠し持っていた切ない感情を自由に意識することを自分に許した。この気持ちはマスターコピーへも伝えていない、私だけの物。

転移の邪魔になるノイズのない軌道に達するとあなたは早速微小

な探査ポッドを5光分ばかり離れた所へ送り出す、周辺探査、大丈夫、転移！

最初の転移のあと、全システムを再点検する。大丈夫、かなたはサブシステムに船の全コントロールをまかせると最も集中を要する作業を開始した。

そう、生身の陸奥かなたを自らの船の生きた唯一人のクルーとして生み出す作業を開始したのだった。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第四章 旅立ち 第2節

かなたはゆっくりと瞼を開けた。宇宙船としての意識と有機体としての意識の重なりに一瞬ぐらつとする。外界がすべて二重に重なって感じられる。同時に宇宙船の居住区にこもるむつとした臭いが鼻を突く。サブシステムに換気と空気清浄化ユニットの運転を上げるように指示。湿度はもう少し上げなくっちゃ。髪がバサバサになっってしまうわ。

かなたは自らが構成された場所、周囲を緩衝材で囲まれた宇宙船の簡易ベッドルームの中でゆっくりと体をストレッチし全身の動きと感覚を確かめる。OK、大丈夫そう。ベッドの上に体を手繰り寄せて横たわる。重力システム、動作開始。かなたの故郷の星の地表での重力、0.9Gが体に掛かりぐつとベッドに体が沈み込む。それに合わせて重力場に応じた方向感覚がよみがえる。二重化された感覚のなかにもう一つの乖離が生じる。これは仕方のないこと。船外のモニターを全面的に船体からの入力に一本化する。船内モニター映像で自らの姿を確認してみる、鏡で見たのとはちよつと違った印象、体をひねりボディーラインを確認する。重力によつてもたらされた筋肉や脂肪の変位、循環バランスの変化によつておこった水分と血液量のシフト、起き上がれば椎間板の厚さが少しずつ減少して行くだろう。あと一時間もすれば元の体にきちんと戻るはず。

満足したかなたはベッドルームを出ると収納スペースから下着と船内服を取り出し身につけ、化粧室で髪を整え始めた。思わず鼻歌がもれ、胸元にあるはずのいるかのペンダントをまさぐるうとする。無い、あ、そうだ、あれはあちらに置いてきたんだ。一瞬自らで再構成しようとしてかなたは思いとどまった。あれは先輩から頂いた大切な物。代わりは決して作り得ない。だから、また逢えたら、きつとその時……。

船のサブシステムに軽食のオーダーをすると身支度を整えたかな

たは操縦席へと赴いた。

システムの点検の結果などを探査部へ報告するとあなたは銀河平面から遠く離れたノイズの無い場所へ向かって転移を繰り返し、以前も一つの世界への入り口を見つけた秘密の場所へと急いだ。マイクロチューブを探査し、状態を確認していく。報告の通り、まだマイクロチューブは極めて不安定の様だ、特に長いL値をもったものは極めて短命に消滅していく。この様なマイクロチューブへの進入を試みる事はまさに自殺行為にほかならない。だが、あなたには考えがあった。それは微小な探査様ゾンデを高次マイクロチューブに投入すること。マイクロチューブ内に敷設されたゾンデを利用するという異世界の友人の行った探査方法を発展・踏襲するのだ。こうすれば最小限のリスクできつと探査の可能性を探ることが出来る。この世界と、もう一つの世界の歪度に一致した物だけを選択し、あなたは用意した数億個のゾンデを見いだしたマイクロチューブへと投入していった。

後は投入したゾンデがマイクロチューブを通じた時空の情報ネットワークを組み立てるのをひたすら待つ。

その間あなたは自身の超宇宙船に搭載したSRエンジンを用い、異なる世界の物質を高次元空間への畳み込みを利用して重畳させて存在させる数学的な方法についての長い検討にはいった。

最初の朗報が入ったのは予想に反して異世界についての情報であった。それもあなたが一番望んでいた情報、なんと残してきたペンダントの発する微弱な素粒子崩壊に伴うバースト信号を傍受したのだ。これは、かなり残してきた情報素子の崩壊が進んでいるらしい。ペンダントに急いでトレーサープログラムとメッセージを送る。メッセージは先輩の時計に転送されるはず。

KANATA・M< キョン先輩、ごめんなさい、もう少し待って下さい、絶対会いに行きますから

メッセージは届いたのだろうか？

データを送り終えた時、不安定なマイクロチューブの接続はすでに断絶していた。

でも、良い徴候。上手くトレーサープログラムがインストールされていればあのペンダントの存在する時空の探査が容易になる。先輩は私に気がついてくれただろうか？

あなたは気がついていなかった、この宇宙の別の時空、超過去において同じくマイクロチューブを介した探査を行い、回復しつつある接続を介して愛しい人のいる宇宙を探しだし、あなたの投入した微小な探査ゾンをそこへと導いた存在を、そして同じ信号を傍受し安堵の笑みをもらしたたもう一つの存在、もう一人のあなたが居たことを。

あなたはあの時必死の思いで絆として託してきたペンダントが役割を果たしてくれていたことに安堵する。再びあなたはサーチと研究を開始した。

程なくトレーサープログラムはきちんとインストール出来た事が確認される。長い時間の接続は出来ないが短い時間での断片的な接続と情報の取得が可能となったのだ。あなたは長い時間をかけて向こうの世界で緊急避難としての向こうの世界のあなたと姉さまとで行っている宇宙船建造のプログラムの存在を知るに至る。凄い、向こうの世界の私。でも、消耗が激しい、残された時間は殆ど無いはず。あなたは向こうの世界のあなたの情報をペンダント内に保持するためのプログラムを作成しバースト送信で何度か転送する。一つでも届いて入れば向こうの私が消えてももう一度回収できるはず、あんなに凄い私を失いたくない。

続いてあなたは向こうの世界のペンダントにこちらの世界の物質を送る方法についての検討を開始した。素粒子でも良い、上手く送れば向こうの物質との相互作用についてもっと詳細なデータを研

究にフィードバック出来る。益々やるべき事は増えたけれどプランも具体的になってきた。きっとまた逢えるから、だからもっと頑張ろう。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第四章 旅立ち 第3節

やがてかなたの妹の船達と武蔵とその兄弟船が完成し宇宙での探査に就いた事の連絡が入る。SR世界で失われた生物種の復元プロジェクトも幾分進行しているらしい。かなたが持ち帰った別宇宙の文化は一時の流行で終わることなくむしろメジャーな文化様式、生活様式として定着しているらしい。おかげでかなたが離れてからもその資産はとてつもなく増え続けているとの事。運用についてはかなたのマスターコピーである妹と涼子に全面的に任せると連絡しておく。

数十年にわたる探査がやがて実を結び始めた。オリジナルのかなたが伝説の船、オリジナルの武蔵と共に行った試みが成功した証が次第に集積されてきたのだ。漸く開いた過去への高次元マイクロチューブの探査の結果は生まれ変わった宇宙が広大で安定した存在である事が証明されたのだ。その結果を受けかなたの妹の船の一隻が過去への跳躍を行い、驚くべき情報を携えて戻った。過去において未登録でしかもより洗練されたかなたの姉妹を名乗る非常に高齢な超宇宙船と遭遇したというのだ。そしてその宇宙船が管理しているというところある銀河に生存の適した惑星が存在し、なおかつ其処に生命圏が誕生していると言うのだ。そのかなたの姉妹の船は由来についての説明は拒んだという、いずれ明らかになるとだけ言い、その銀河のマップと生存可能な第二の故郷の候補となる惑星についての資料を引き継ぐと何処かへと文字通り消失してしまったという。

持ち帰った資料は極めて精緻であり信憑性が高い物と判断され、大規模な調査が行われることとなった。出会ったかなたの姉妹については様々な推測が為されたがおそらく再生した宇宙のはるか未来から過去のメンテナンスのために使わされた超宇宙船であろうという事で結論づけられた。すなわち再生された新たな宇宙の新たな未

来と遭遇したものと判断されたのだった。

探査部はにわかには忙しくなった。無人探査機が実際に惑星の地上に降り立ち、そこが実際に移住可能な惑星、多くの植物と動物にあふれ、酸素も海も陸地も有る豊かな惑星であることが明らかになると、その事実はかなたの故郷の世界に大ニュースとして伝えられることとなった。そのこの生物の生命の基本様式、構成するアミノ酸などの組成、遺伝情報の形式などが驚くべき事にかなたの故郷の物と一致したのだ。この事実がこの惑星が移民のために設計され用意されたものであるという仮説がさらに信憑性が増したものとなった。ただ、直ちにこの世界に移民することは出来ない。確かにこの世界に食料を調達する事は可能だろう、だが同時にこの世界の野生の物にとつても人類が格好の餌になり、細菌の感染の場となり得る事を意味するからだ。このため移住に備えたスペースコロニーを建造しそこで移住のための準備を行う事となった。幾多の微生物と共存できる人類を再び生み出すための壮大な事業がスタートするのだ。そのためにはこの惑星の生命圏の研究だけではなく、かなたの故郷の生命がどのような存在であったのか、そしてかなたが訪れた異世界の生命の様式、自然と共存している野生の人類についての研究が大きな意味を成すことだと期待された。

安定会した過去への高次マイクロチューブを旅してかなた自身もその惑星を訪れる。スペースコロニーの設計、建造にも関与するなど大忙しの年月を過ごすこととなったのだ。

先輩の居る異世界から断続的に情報が入る。向こうの世界の私が消滅した後、どうやら姉さまはもう一人の私を構成し、宇宙船の建造を続けているらしい。でも、姉さまが構成した私は偽物、ダメ、先輩を取らないで。

再開通したタイミングを狙ってメッセージを送る。

『もう少し待ってください、あと、その私とは仲良くならないで』

過去とかなたの居た未来を繋ぐ高次元マイクロチューブが安定化した頃、かなたが分かれてきた異世界とのマイクロチューブもかなり安定化してきた。

あ、先輩が有希姉さまとお話をしている。

ペンダントを通じて先輩の時計へ連絡を送る。

『キヨン先輩、有希姉さま、かなたです』

漸く暫定マイクロチューブの敷設が可能になりました。

でも、まだ不安定です』

『聞こえるか？ 無事なのか？』

ああ、懐かしい声。

『無事といえば無事ですが、ちょっと複雑です』

まだマイクロチューブが不安定、僅かな情報チャンネルしか開通できないんです

そちらの私にも、ペンダント買ってくださいね』

漸く長い時間の通話が可能となった、もう少し……・

かなたの主観時間で百年が経過した頃、待ちに待った連絡が来た。漸く神の視座が武蔵により再発見されたのだ。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第四章 旅立ち 第4節

武蔵のナビゲーションにより程なくかなたも神の視座を訪れた。

神の視座の空間の壁面にうがたれた無数のマイクロチューブに注意深くマイクロゾンを敷設していく。この特殊な空間を保護するため訪れたのは武蔵とかなたの二隻だけ、だがこの二隻はかなたの故郷の生んだ最高の二隻。全ての期待を担い探査が進められた。

「武蔵さん、凄いですね、想像以上の数の銀河に満ちています。しかも膨張の速度のシミュレーションによれば奇跡的に安定した寿命も持つ宇宙に生まれ変わってます」

「あの時、あなた、というか、あなたの船に乗り込んで居られた異世界のリーダーの女性の提案を伺ったときは度肝を抜かれましたが、こつも見事に成功するとは思っても寄りませんでした。

払った代償に十分見合う物ですし、私はそれに係わることができて本当に光栄です」

二人の探査により次々と新しい発見が生まれる。どうやらこの神の視座からは四十億年程度の宇宙の歴史にアクセス出来るようだ。それ以前、それ以後は何故か安定したマイクロチューブが存在しない様だ。理由は不明、だが当面の目的には十分だ。

神の視座からの観測は短期間に目覚ましい成果を上げた。なんと居住可能な惑星をもつ星系が幾つもの銀河でそれぞれ複数個発見されたのだ。これはかなた達の文明の飛躍的敷延を約束する情報であった。

「かなたさん、これだけの資源と場所があればアーカイブされた全ての人格を蘇らせてもなお全体の1%にも満たないに違いありません。

探査部の部長は大喜びですね」

「ええ、最初の星系への移住も上手くいきそうです。

ただ、大規模な時間の巻き戻しを頻回に行えば宇宙の安定性を失

うかもしれません。

居住可能な惑星を完成させる作業、プランテーションは慎重にしないで

「でも、これだけの結果が出てるんですから、探査部の方針の偉大なる成果ですよ」

「はい、そのためにのあの方達の地球の生態系の調査は必須だと思います。」

長い進化と淘汰の成果を知ることが大切だと思います」

「そうですね、あなたさんの先輩達の居られる宇宙への道も一生懸命探さなくてはいけません」

やがてあなたは以前の経路を参考に特殊な分岐を持つマイクロチユーブへの道を探し求め、ついに道を遡る様にして先輩達のいる時空への経路が見いだされた。

それこそ飛んで逢いに行きたい。だが、あなたは幾度となく繰り返したシミュレーションと考察によりそれを思いとどまった。あの宇宙にとって異世界であるあなたの世界からの訪問は極めて重大な結果をもたらしかねない。銀河統合思念体や他の銀河に存在するに違いないその亜種や同胞、天蓋領域と呼称されていた存在、あの世界の未来からの干渉、そのどれも直接接することは絶対に避けなければならぬから。無秩序の交流は双方の宇宙の崩壊すら起こしかねない、場合によっては侵略さえ受ける恐れすらあるのだから。

あなたは残してきたペンダントへ安定化した高次元マイクロチップの通信路を確保する事にした。これならば通信を傍受される可能性はほぼ無い。リスクを最小にするための処置。

だがそのためにはノイズの無い環境が必要、出来れば地球から遠く離れた場所が良いが。あなたはペンダントからの情報のモニターを続けた。

やがて待ち望んだ情報が届く、先輩と姉さまの乗る宇宙船が完成し先輩と一緒に宇宙空間への試験飛行が行われる。百年間待った時がもうすぐやってくる、僅かな待ち時間に身が焦がれる思いでか

あなたはその時を待った。

よし、この場所なら大丈夫。

セ・ン・パ・イ！

『宇宙船の全システムをオフにしてください』

『一体何なのだ？ 長門、これは？』

『あなたの指示に従う。』

生命維持装置、対宇宙線シールド、物理バリアーを停止する。

宇宙服、ヘルメットを装着しバッグパックに接続。

貴方の時計は宇宙服の外に装着して』

あ、宇宙服のシステムもノイズの原因になる、全てを止めて頂かなくては。

『いえ、そのままお願いします』

『宇宙服を着ないでシステムを停止することはそんなに大変な事なのか？』

『生命維持を含め、すべての保安・安全システムが停止することはきわめて重大な危険を意味します。』

お願い、姉さま、もう一人の私、解って。

『すぐすむ予定です、ノイズがあると駄目なんです』

『あなたがそう言った、長門、頼む』

ああ、先輩、お願い、姉さまを説得して。

『真実のあなたである保障が無い』

う、嘘よ、姉さま、やっと連絡がとれたのに、私、あなたです。

『長門の心配も尤もだ、って、こんな所で他の勢力が狙ってるとか
在り得るのか？』

そんな、何か本当に有ったのだろうか？

『地球を離れる時点で未来人によると思われるアダムスキー型宇宙船が私たちを追尾していました。』

統合思念体による情報スキャンも飛行の過程で受けています』

私が直接訪問しなくて正解だったみたい、でも、どうすれば……

『陸奥さん、それって、超ヤバくないか？』

『かなたの宇宙との離断がもたらした時間の巻き戻り、時空改変は両者にわれわれの行動に不審を抱かせる原因となったと推測する』

『じゃ、あの喜緑江美里女史の来訪もそのため？』

『多分、そうだと思います』

やはり大変な事になっていたんだ。迷惑かけてしまっでご免なさい、でも、信じて下さい。

『俺は本当のかなただと思うが、そうだ、かなた、俺がした約束でまだ果たしていないものは何だ？』

『うふ、覚えてますよ、一つは本物のさくらんぼ、もう一つは指輪です』

あと、本物のうさぎさんも見せてくださるんでしたよね？』

『長門、間違いない、時間がまき戻る前に別れたかなただ』

『さくらんぼは……』

え、あれはダークチェリーだったはず。

『この間、このペンダントで復活したかなたには食べさせてやったが、あの時別れたかなたには、まだだ。当事者しか知りえない真実だと、俺は思う。長門、頼む』

そうだったんだ、ちよつと、残念。

『全てのシステムを停止する、許可を』

『ああ、やってくれ』

良かった、ノイズレベルが極小に落ち着いた。これなら出来る。

少しずつ送っておいたこちらの世界の物質とプログラムを活性化させる。ペンダント内に高次元マイクロチューブを固定するための精緻な作業が開始されたはず。ひたすら完成の証となる接続を待つ。大丈夫、あれほど用意したのだから、絶対に大丈夫。唯ひたすら待ち続けていると漸く回線が復活した。チェックする。大丈夫、設計通り。

『ペンダント内に高次元マイクロチューブを固着する作業が終わりました』

引き続きナノデバイスをペンダント内へ転送します』

これが有れば姉さまが作られた宇宙船の機能を格段に引き上げることが出来るはず。

やった、送付成功。

『もう、システムを起動していただいでかまいません』

向こうから安堵の声が漏れ聞こえた。システムが起動した様だ。

『システム、大丈夫でしたよね？』

『異常の痕跡は発見されなかった』

『では、ペンダントを有希姉さまに渡してください』

ペンダントを介し姉さまに直接情報を送る。ペンダントへ送ったナノデバイスの取り出し方、使い方の情報を圧縮データで届ける。

『感謝する、当方の船の設計データはこれ』

姉さまから届いたシステム情報にさつと目を通す、なるほど、よく考えられている。ことらの世界でも設計に利用できる。姉さま、有り難う。

先輩と姉さまの船はその後無事に帰還を果たした。暫くするとあちらの宇宙船のシステムとの稼働を検知した。渡したディバイスは上手く組み込めたようだ。これで姉さまの船の機動性が改善するはず、ノイズの無い空間への転移も容易になるだろう。そうすれば今度はこちらの船のもっと大がかりな改装が可能になるはず。百年越しの計画にやっと目星がついたことかあなたはほっと胸をなでおろした。きっともうすぐ逢える。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第五章 再会 第1節

かなたは姉さまからもらったあちらの世界での新しい船の設計とその設計思想を参考にレポートを作成する。かなたは自らの情報処理能力で対応できることからあまり気にしていなかったハードウェア的な安全機構のバックアップ思想など参考になる部分はとても多い。生身の先輩達の安全を確保するために姉さまが考え抜かれた結果だろう。

出来上がったレポートを探査部、今は移民準備省に格上げされているのだが、そこへ送付した。折り返し長官と涼子から感謝のメッセージが届く。建造中の軌道上植民モジュールの設計に早速その思想を反映させるとの事であった。また、向こうの世界の情報が有用である事が更に実証された事からさらに情報収集をするように懇願されてしまった。もはや向こうの世界に何とかして戻ることがかなた自らの希望であるだけでなくこの世界全体からの強い要請にすらなってきた事に改めてかなたは驚いた。

残してきたペンダントを介して先輩からの呼び出しが届く。嬉しい。

『はい、キヨン先輩、心配かけて御免なさい。大丈夫です』

『良かった、そちらの宇宙は大丈夫なんだな？』

『そう、まずはその事をお知らせしなくては……』

『キヨン先輩と涼宮先輩、有希姉さまのおかげです。』

事後処理というか未来と過去のための処理というか、ずっと大変でした』

『ずっとって？ そんなに、ずっと忙しかったのか？』

本当に、こんなに上手く全てのことが運ぶなんて、先輩達のお陰です。でも、こちらでの出来事、詳しくお話したら何年かかるでしょう？

『前の時間軸で分かれてからそちらの時間で約百年経っていますで

す、御免なさい、私、お婆さんです』

あ、言っちゃった。嫌われるかな……。

『うそ、だろ？ それより、こちらに来れないのか？』

やっぱり先輩、優しい。それでも逢ってくださるんだ。

『おばあさんでも、会いに行つて言いですか？』

『そんなの信じられないし、俺はかなたに会いたいんだ。 SOS団
のツインテ後輩の席はかなたしか駄目なんだ。』

うふ、よかった、でも、本当？

『キヨン先輩、信じていて良いですか？』

『約束だつてまだ果たしていない、俺はかなたに帰つて来て欲しい。』

『夢みたい、夢見た先輩の言葉がそのまま……』

『ぎゅって、してくださいね』

そう、今、分かった。私はそのために今まで頑張ってきたんだ。

『もちろんだ、待ってる。』

はい、先輩、絶対逢いたい。でも、そのためにはまだ為すべき事
が……

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第五章 再会 第2節

暫く前からかなたの居た未来から新しく生まれた過去の居住可能な惑星への物資とアーカイブされた幾多のデータ、すなわち人格達が輸送されてきている。それらの機材とデータは一旦軌道上の建設されている巨大ステーションに運び込まれている。惑星は新地球と名付けられ、その巨大な衛星、ノイエと名付けられた月に資材受け入れ基地と空港、工場群ならびに新たな居住都市の建設も平行して行われている。当面ノイエの地下に複数の巨大サイバー空間を維持する為のハードウェアを建設しそこに眠りについた状態で移送されてきた人格データとその記憶を移植するのだ。現在稼働してる人格はかなたの武蔵の姉妹、兄弟を含めおよそ二万、現実の宇宙空間で作業する訓練を受けたスペシャリスト達と科学者ならびに移民準備省のメンバー達だ。シミュレーションでは未来世界は間もなく宇宙の広汎な歴史書き換えの影響で消滅する。データ化された情報はほぼ移送を終え、あとは厳選された凍結標本や歴史的に貴重な遺物、残っていた文化的遺産の内移送可能な物の搬送、そしてあちらに残って居作業しているメンバーの搬送が残っているだけ。

かなたは作業の合間に先輩の様子と姉さまの宇宙船の様子をモニターする。無事彗星の撃破が成功したらしい、良かった。次は天蓋領域の探査、あの宇宙船のままでは荷が重い、でも銀河平面からある程度離れてノイズのない領域まで出ることが出来ればこちらからハードとソフトの支援ができる、それを待とう。かなたは計画した思考とシュミレーターの中で手順を反芻しながらその時をまった、もう少しで安定領域……

その瞬間ペンダントとも、宇宙船とともに一切の連絡が取れなくなる、突然のブラックアウト。

何が起こったのだろう、他の高次元マイクロチューブに敷設したゾンデを介して先輩のいる時空への接続を試みる。接続は可能。高

次宇宙での乱れによる断絶では無いようだ。ならば何が起こった？
強力な妨害が行われたと判断すべき、相手は恐らく天蓋領域。あなたは危険を冒してでも緊急に先輩の居るはずの宇宙、時空へ赴くための用意を開始した。一方でペンダントへの接続要求も出し続ける。何か、きつとんでも無い事が起きている。あなたの不安は恐怖の感情へと姿を変えつつあった。

今、まさに出発しようという時、突然何事もなかったかの様にペンダントとの接続が回復した。情報を読み込み状況を解析する。時計に残された更新記録からあなたは恐ろしい状況にあった事を知った。思わず全身に力が抜け操縦席の上で天を仰ぐ。ぎりぎりだったんだ、先輩、感謝します。ペンダントを経由して先輩の時計へアクセスする。

『キヨン先輩、有希姉さま、それから、もう一人の私、あなたです』
『あなた、無事だったんだな、良かった』

『キヨン先輩が結界を破つてくださったからです』
『何が一体起こったんだ？』

『ノートパソコンがハッキングされたんだと思います。』

それで有希姉さまの宇宙船の居場所が特定されてしまい、結界に支配されてしまった……』

姉さまの状態もぎりぎりだけど、意識は回復した様だ。

『いま、有希姉さまを起こしました、姉さま、居住ブロックに戻ってください、早く』

『了承』

先輩が必死になって姉さまに呼びかけている。もう一人の私、手伝って！

よかった、姉さまも無事。ペンダントと時計を介して姉さまと直接情報交換をする。

ノートパソコンがハッキングされそれによってお姉さまの船の位置情報などが漏れ、攻撃を受けたという判断で意見が一致した。

『今、有希姉さまと相談しました、有希姉さまとの光子ペア通信、』

私との高次元マイクロチューブを介した通信以外は危険です。ノー

トパソコンはもう、そこでは使わないでくださいね』

『ああ、もう電源を切った、多分大丈夫だ』

かなたはほっと息をついた。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第五章 再会 第3節

安堵すると同時に全てを失いかけていた事に再び恐怖する。高次元マイクロチューブを用いた通信の弱点、非常に強力なエネルギー場や、たとえば時空が極端に不安定になった場合や今度の様に結果により異空間へと途絶された場合には伝達すら出来なくなるという弱点を再認識させられた。同じ宇宙の中であれば光子ペア通信も可能だが時空そのものが別のマトリックスの上に存在すればそれも無理。良い策を見いだせぬままかなたは姉さまの乗る宇宙船へコンタクトし当面の計画のための打合を開始した。

まず引き続きノイズのより少ない空間へ船を転移させてもらう。そして高次元マイクロチューブの固定とそこを通じての航行のためのデバイスを転送し組み込んでいく。

まだ、姉さまの船をこちらには連れてこれない。銀河統合思念体の想定する技術水準を超えた性能を持つ事は不自然。これまでの性能の改善でもあるいは疑念を持たれる危険が無いわけで無いのだから。統合思念体の疑念を受けずに行動するには涼宮先輩の能力を隠れ蓑にしなくては。その後、明日に備えて姉さまの船から向こうの世界の空気を送って貰う。生身の先輩がこちらの世界の物質で汚染されるのを避けるため。

明日に備えて細部の計画を姉さま、もう一人の私と打ち合わせていく。

『さあ、姉さま。もう帰って休んで下さい。明日は大仕事が待っていますから』

『了解した、明日、必ず』

『はい、お願いします』

姉さまの船が無事帰還した事を確認する。先輩の作ったカレー、私も食べたかったな……

かなたはペンダントを介して先輩の様子を時計からモニターする。脳波に速い波が増えてきている。睡眠深度が浅くなっている、時刻は午前五時20分、起こさなくっちゃ。

『セ・ン・パ・イ』

おはようございます、キヨン先輩。五時二十分です。』

『おはよう、かなた。長門達は無事なのか？』

先輩は昨夜の事が余程堪えたんだ。姉さまったら直接お知らせすれば良いのに先輩が睡眠中だからってご飯を食べてさっさと休んじやうんだから、でも姉さまには大仕事が待っているからしっかり休んでいただきましょう。

『はい、午前3時過ぎに無事帰還され、カレーライスを沢山食べて、今、御休みです。』

『良かった、かなたのお陰だ。』

『いいえ、キヨン先輩のお陰です。そろそろ涼宮先輩がいらっしやいます。』

お顔、洗っていらしてくださいな。』

『ああ、かなた、ありがとう。顔洗ってくるな。』

『はい、戻れたら、私にもカレーライス、作ってくださいね。』

『もちろんだ、じゃ、戻ってきてくれるんだな？』

『キヨン先輩と有希姉さまが許してくださいるなら、戻りたいです。』
そのためにこの百年、準備して来たのだから。

さあ、先輩達の為に最後の用意をしよう。あの宇宙へ向かう高次元マイクロチューブに道しるべとなるゾンデを投入する。これを目印に姉様達にはこの神の視座に来ていただく。

いくら何でももう一度偶然にこの世界を一度で発見することは期待できない。

二度目は私が道案内をします。

かなたへ 第七部 終焉のかなた 第五章 再会 第4節

待ちに待ったその時はようやく近づいてきた、先輩達の船がこの神の視座へと通じる高次元マイクロチューブにへ到達した。生身のかなたは武蔵の船体へと乗り込む。かなたの宇宙船としての本体は数あるマイクロチューブのトンネルの一つへと身を潜める。武蔵と最後の打ち合わせを行う。用意したシミュレーション画像を点検する。動き、会話内容をチェック。大丈夫。SRの中で三人を演じた仮装人格はそれぞれかなたと武蔵の分身。万が一に備えてSRでもスタンバイして変わった事があれば直ぐにSRからの生放映に切り替えるべく最終チェックも行う。

「かなたさん、大丈夫です。」

きつと彼は受け入れてくれます。

これだけ準備したんですから。

後のことは任せて下さい。

かなたさんの妹さん達と協力して絶対成功させますから」

「武蔵さん、お願いします。」

これって、私の我儘なのは分かってます。

でも、あちらの世界の情報を安全に入手するための方法でもあるし、これはきつと故郷の世界にとっても必要な事だと信じてるんです。

お願いします」

緊張の時間が過ぎ、先輩達の乗った船が現れた。武蔵が先輩達の船と交信を行っている。さあ、ここ、ちゃんと二人でこちらに来て貰わなくては。

「セ・ン・パ・イ

キヨン先輩と、もう一人の私とで来てください。

お願い」

先輩が機転を利かせてくれた。あとは無事にこちらに辿り着いて

貰わなければ。

モニターに先輩達の姿が映る。上手い、そう、ジェットを重心線で吹かせている、ずれたら体の回転が起こってちよつと大変になつただろう。そうしたら向こうの船のモニターにはSRの画像を送つて救援に飛んでいくつもりだったが、大丈夫なようだ。

二人がエアロックからこちらへやってきた。

「キヨン先輩、船内は空気で与圧されています。ヘルメット、取ってくださいっていいですよ」

ヘルメットを外したもう一人の私。

「うん、新鮮な空気だ」

先輩がこちらに向かって近づいて来る。ああ、どうしよう。体が震える。

「本当に、かなたなんだな？」

「はい、私です、キヨン先輩、とうとう、逢えました。ぎゅつと、してください」

先輩が私を抱き寄せてくれる、力一杯抱きしめてくれる。

「ああ、そう、かなただ。間違いない」

「すつと、ずつと待ってました、来てくださると信じていました、よかった、逢いたかった」

「俺も、逢いたかった、長門も、この、陸奥さんも、それから、消えちまったもうひとりのかなたも、みんな、物凄く頑張ってくれた」

「キヨン先輩の想いがそれだけ強かったから、有希姉さまはキヨン先輩の悲しみを見たくなかったから、あんなに頑張ってくださいったんだと思います」

「陸奥さんだつて、本当に、良くやってくれた、ありがとう」

そう言った瞬間、先輩の顔に不安がよぎる。先輩、気がついたんだ。先輩の宇宙に戻るかなたは唯一人だけだという事に。

「大丈夫、キヨン先輩、大丈夫ですよ。」

優しいキヨン先輩の心配、分かっています」

私は先輩の頬に口付けをすると先輩の首元から、あのいるかのペ

ンダントをそつと引き出す。

「全部、うまくいきます、キヨン先輩、信じてくださいね。さあ、もう一人の私、ここへ」

ペンダントを私の胸に下げるともう一人の私を立たせる。

「もう一人の私は有希姉さまがキヨン先輩の宇宙の物質で構成してくださいました身体、私の身体は私の宇宙で再構成された身体、そして……」

ペンダントに残された情報から向こうの世界で消滅した私をもう一人の私と一緒に再構成する。二つの宇宙の情報から校正された三人目の私が光の粒のなかから姿を現した。

「私は、キヨン先輩のお家で消えてしまったかなたです、消えるときに、ペンダントに刻んでおいた私の情報を、キヨン先輩がこうして届けてくださいました。そして、今、二人の私が、私を再構成してくれたんです」

さあ、最後の仕上げを……

「今から、三人の私がつつになります、そうして両方の宇宙の物質が高次元で重なっているに私に生まれ変わります。生まれ変わった私はキヨン先輩の宇宙でも、前の時間軸の私より、ずっと安定して存在できる私になります」

三人の私が縦一列にならんで重なり合おうと下瞬間、第四の私が空間に突如出現して溶け込んでくる、何？ 一瞬パニックになる。何を間違えたのだろう、でも、このプロセスは途中で停止出来ない、極めて繊細な処置……

重畳化が終わった瞬間莫大な思いと知識が私のなかに流れ込んでくる。

ああ、これも私。あの時永劫に失ったと思った私。

そうだったのか、私がこの宇宙をこの形に意志をもって生まれ変わらせたのだ。

居住可能な惑星を用意し、そこへ未来から辿り着いた私たちを導いた私の姉妹船は宇宙誕生の炎の中から蘇ったこの私の分身だった

のだ。

大きな宇宙の歴史の環の中で私は再び自身と巡り会い一つになった、先輩の元へ戻るために。

先輩の乗ってきた宇宙船にはSRの画像を転送している。その間にもう一つの大仕事。宇宙船としてのかなたを先輩達の船に重畳させるのだ。

そろりと居住ユニットを放出した宇宙船にかなたの宇宙船が近づき、輝く光の粒をまき散らしながら静かに重なり合っていく。機能を確認、大丈夫。

そろりと居住ユニットを再度その船腹に飲み込んだ瞬間、生身の体で宇宙服に収まった私は先輩の手を引いて武蔵さんの宇宙船のエアロックから出たからそろりと離れた。

再びあの世界へと戻るために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5518j/>

かなたへ 第七部 終焉のかなた

2010年10月8日12時37分発行